

第3回門真市魅力ある教育づくり審議会

(第2回子どもの学ぶ意欲向上部会) 議事録

開催日時 平成29年2月17日(金) 午後2時40分

開催場所 市役所本館2階 第6会議室

出席者 新谷龍太郎、片山仁、川村早余子、上甲尚、中川智広

事務局 満永学校教育部長、西岡教育総務課長、
杉井学校教育課参事、向井学校教育課課長補佐、永田教育総務課主査

傍聴者 1人

議事

新谷部会長

それでは、子どもの学ぶ意欲の向上部会を開催させていただきます。
本日もどうぞよろしくお願いいたします。

全委員

お願いします。

新谷部会長

それではまず事務局から、今回の部会での議題の説明をお願いいたします。

事務局(西岡教育総務課長)

それでは、お手元にございます門真市教育振興基本計画の14ページをご覧ください
ただけますでしょうか。

こちらに本市での一人ひとりの学びに応じた学習支援の取組状況と課題が記載
をされております。その課題解決を図るために個々の学びに応じた学習支援
を実施しやすい授業形態についての検討や学習評価の方法について検討をして
いただきたいと思いますと考えております。

続きまして、資料の3「門真市魅力ある教育づくり審議会の今後の流れ(案)」

をご覧ください。

今回の部会では学校における自学自習の在り方、子どもの発達段階を考慮した支援内容について議論をしていただきたいと考えております。そのための討議の柱といたしまして、まず、「①サタスタ・まなび舎の現状と展望」をご議論していただき、次に「②学校における自学自習体制の状況について」、「③自学自習体制の充実に大切なことは」について議論していただいた上で、最後に具体的な方法として、「④低学年・高学年・中学校それぞれの段階でどのような学び支援が適切なのか」を議論していただきたいと考えております。このような内容をもとにして、自由にご議論していただきたいと思いますのでよろしくお願ひします。

また議論していただくお時間ですが、大変申し訳ありませんが、4時を目処にさせていただき、残り10分で意見の集約をお願いしたいと考えております。

新谷部会長

はい。ありがとうございます。それでは、事務局から提案がありました討議の柱をもとにして議論を進めていきたいと思ひます。

ちょっと議題の確認なのですが、討議の柱の4番に低学年、高学年とありますが、中学年は特に検討の対象外としてよろしいのでしょうか。

事務局（西岡教育総務課長）

中学年も含めてです。

新谷部会長

含めてですか。

事務局（西岡教育総務課長）

そうです。

新谷部会長

低学年、中学年、高学年、中学校ですか。

事務局（西岡教育総務課長）

1～3年と、4年から5、6ということで分けさせてもらいました。分かりにくい書き方で申し訳ありません。

新谷部会長

そういう段階ですね。9年間ということですね。分かりました。3つのステージですね。

それでは、討議の柱のサタスタ、学び舎の現状と課題ということですが、これは実際に関わっていただいている方々からぜひ伺いたいと思っておりますので、小学校、中学校、川村委員という流れでご報告いただければありがたいと思います。

小学校はないのですね。川村委員が関わっていらっしゃるの小学校ですか。

川村委員

小学校です。

新谷部会長

分かりました。では川村委員からお願いできますでしょうか。

川村委員

どういことを言えばいいですか。様子とかですか。

新谷部会長

まず、いつぐらいから関わりを始められましたか。

川村委員

私はこの一番最初の資料にあった20年度から、学び舎に行っていて、サタスタの方も21年度の開始からずっと関わっています。

最初の頃は、毎週ずっと関わっていて、今は水曜日の学び舎の方は基本的に毎週参加をして、土曜日の方は、私も行けない時がありますので、他のスタッフをお願いをして、順番に行ってもらって、回すようにしています。サタスタの方は、土曜日の午前中なので、来る子もいれば、申込だけして来ない子もいますので、いろいろです。比較的、来始めるとその子は継続して来るのかなど。でも来ない子は最初から来ない。家の人に言われて、こんなあるから行っておいでと言われたものの、親が勝手に申し込んでいて、僕は行かないとか、私は行かないっていう感じなのかなと思います。五月田小学校という小学校で関わっているのですが、25名ほどの申し込みがあつて、五月田小学校に関しては、ほぼ20名程度は毎回来るので、比較的申し込んだ子は来ているのかなど。すいません、サタスタって言いましたか。学び舎の話をしていました。すいません。学び舎は、自由出席制にしています。水曜日の放課後で、自由出席制です。一番最初は、申込制で、申込をして2時間、放課後2時半から4時半

までやっていたのですが、授業の後の2時間は小学生ではもたなくて、気はまぎれて集中できないし、最初は、5・6年生、高学年が対象だったのですが、そこだけではやっぱり授業についていけない子が、多分つまづいているのは3年生4年生からかなと思い、だんだん学年を下におろしていったのです。最終的に1年生から6年生まで募集をかけたのですが、1年生は、まあ平仮名とか片仮名とか、字を書いたり、算数もまずは123の概念とか、そういうもので、なかなか放課後に学習をさらにするということまで行ききらなかったのです。あとはやることがないとけんかしたりとか、そういうこともあって、最終的にもう2年生から、今、6年生までの募集で、かつ、もう2時間の枠も取りまして、募集も自由出席制、完全自由出席制にして、3年ほどしています。だから、本当に宿題だけをしにきて、もう10分15分で帰る子もいれば、その後に図書室の開放もしているのも、本まで読んで帰るっていう子もいて、常時、水曜日の放課後は、50人から多い時は70人くらいの参加があります。

土曜日のサタスタの方は、申込制にしていまして、そこで親が申し込んだら、来ないとか来るとかで、やっぱり休みの日に学校に行くっていうハードルもあるのか、子どもは少ないのは少ないです。学び舎に比べると20人くらいの参加なので、少ないです。五月田小学校の特色としては、第七中学校が同じ中学校区になるのですが、子ども達にお兄ちゃんやお姉ちゃんの姿を見せることで、僕もこんな中学生になると。中学生の子が、そういうのを見られるという意識でちょっとしっかりしてくれたりいいなという思いもあって、科学部の方をお願いをして、1年に1回、負担なくということで、体験実験をさせてもらっています。去年は葉脈の実験をして、今年はちょうど来週の土曜日に万華鏡づくりを七中の理科の先生がしてくれるので、そういう連携も少しずつしながら活動しています。

新谷部会長

ありがとうございます。いくつか質問をしたいのですが、まず20年度、最初に関わられたときに手伝っていただける方に対する広報がどういったものだったのかということと、なぜいかれようと思ったのかということところを。

川村委員

はい。スタッフとして関わったのは、その当時、この立ち上げをするっていう企画が生涯学習課で学び舎事業、多分、それは合っていますよね。で、その時にコーディネーターとして立ち上げに携わってスタッフを集めているという方から直接だったと思います。それと子どもが持ってきたお手紙にお手伝いできませんか、どうですかっていうのがあって、純粹にお手伝いをしようと思っ

たので行き、その後ずっと続いているのは、門真の現状を考えた時に少しでもやっぱり学力につながったらいいなという思いがあって、ずっと続けています。

新谷部会長

今、例えば学び舎 Kids にスタッフとして登録、小学校で登録している方と、実際に動いているメンバーはどれくらいの数なのでしょうか。

川村委員

学校によってそれはすごく様々で、勉強を教えるっていう意味で、学習支援アドバイザーがいますが、それは学生さんが中心で、あと元教員とか大学生の子が、地域の大学生がほとんどなのですが、学校の立地条件によって、駅が近いとか、近くないとか、そういうので学生さんの集まりが違うのですね。

五月田小学校っていうのは駅からも少し距離が離れたところにありまして、私がアドバイザーとして入って、地域の方に、保護者とかおじいちゃんおばあちゃんくらいの世代の方とかにお願いをして、管理員として入っていただくという形で。去年からは偶然なのですが、お手伝いをしていただけるっていう元教師の先生が、他の学校を希望されていたのですが、そこはもう学生さんが埋まっていたので、ここだったら空きがありますっていうので、運よく回っていただいて、今はそういう状態で、常時、アドバイザーとかも入れて、6・7名で教室、自由出席制にすると、最初の1時間はすごく大変で、教室3部屋使って、その部屋に2・3人ずつ入れて見えています。

新谷部会長

そうですか、3部屋だと結構大変ですね。

川村委員

でも一部屋は図書室なので、そこはそんなには。

新谷部会長

そうですか。分かりました。

このとき、教材というのはどういうものなのですか。

川村委員

水曜日の学び舎は、基本的には宿題をしようという声掛けをしているので、来た子ども達は宿題をしています。それとは別にプリント教材もあるので、やりたいという子にはプリント教材を配ったり、パソコンで打ち出しをして渡した

り、図書の本を読みに行ったりというような感じですね。2時間いて、2時間みっちり勉強して帰る子っていうのはほとんどいないです。1時間30分から1時間くらいの子が多いんじゃないのですかね。

新谷部会長

そうですか。

先々週行った北海道の小学校は、こういう放課後の学び部屋が、日中は学校に来づらい子たちが自学する場所になっていたりしていました。どうなんですかね、実際に日中にはいないけども放課後だけ出てきている子どもはいるんでしょうか。

川村委員

多分、五月田小学校の学校自体もそういう子って、多分少ないんじゃないかと思うんです。いないですね。ただ、長いこと見ていて、最初のころは、本当に授業についていけないって、分からないからきっとケンカしてたんやろなっていう子も来ていました。今でも、ちょっとしんどいなっていう子について教えてあげる子もいるのですが、子ども達を幅広く、学力をちょっとでも底上げしてあげようと思うと、そういう、本当は関わってあげないといけないはずの子どもたちが、前に比べると来なくなった気がします。もしかしたら私達がそういうふうにもいろいろ変えていく中で、どうなんですかね、ちょっとわからないですけど、っていうのは思います。

学校の先生、校長先生とお話をして、その辺の連携が取れて、すくいあげることができる、また少し授業に還るものもあるかなと。見ていて同じ学年で、同じ間違いをしている子が多いとか、そういうのは、終わってから先生に何年生は、この問題でこんな間違えてる子が多かったから、ちょっと授業でもう一回復習いるかもっていうのは、年に何回かですけど、よっぽど気になったら、お伝えはするようにしています。

新谷部会長

そうですか。あと、最後1点だけ、この学び舎 Kids で、サタスタはまた後でもお伺いできればいいと思うのですけれども、ずっと関わってこられて、成果と課題みたいなものがあったら、教えて下さい。

川村委員

成果と課題ですか。分からないですけど、でも、子ども達に聞くと、本当にこの子いつも宿題して来ないなという子がやっぱり来てたりするんです。で、そ

ういう子って、来ているからやるかっていうと、やっぱり途中で帰ったり、最後まで出来きれなかったりはするのですが、でも、まったくしない子が水曜日にノート1ページだけでもする。その意識があるのだったら、それはプラスに捉えて、声掛けで少しずつでも全部やれるようになる。水曜日だけじゃなくて家でももう一日くらいできるようになるとか、そういうふうになればいいなと思っています。それはメリットというか。子ども達には還っているのかなって思います。

課題としては、やっぱりもう少し学校で、学校と連携して、私たちは、元教師の人もありますし、教員免許を取っている大学生の子もいるのですが、授業するわけではないので、あれなんですけど、本当にしんどい子にちょっと放課後、このプリント一つ持って向こうでもやっておいでみたいな、そういう形でも構わないので、何かそういう連携ができると苦手な部分の克服に繋がったりとか、できるんじゃないかなと思います。

新谷部会長

すいませんずっとお話を伺っていて。ありがとうございました。とても貴重な意見ありがとうございました。

では、中学校の現状について、お二人から伺えればと思います。事業としては学び舎 Youth の方ですね。サタスタは中学生も入っていますか。

上甲副部会長

入っています。

新谷部会長

ではどちらでも結構です。

中川委員

先ほど杉井先生からもサタスタの説明があったのですが、中学校になりますとそういう環境を整えて下さっているのですが、特に、第五中学校のクラブ活動が、前回入っていない子も多いというような話もあった中で、第五中学校では盛んな方なので、声をかけても「いやクラブ行きたいし」というようなところで、参加人数があんまり上がっていませんというのが現状です。

あとは学び舎であれば水曜ですけれども、こちらも宿泊学習前とかになると委員会の子とかが残って、宿泊の行事に向けての取組を放課後にしたりとか、文化祭であったりとか、行事前になると、そういう放課後にクラブに行く子と取組で残る子などもいるので、なかなか放課後に行けてないかなというのが現

状です。サタスタも同じくでして、ようやくクラブを引退して、受験生となって行くというような形で、逆に言うとさきほどもあったように中学校にもプリント印刷できるようにして下さっているのですが、赤本とか持ってきて、教えてほしいというような子たちが、もう本当に2学期以降です。秋以降に、増えてくるかなと。そういう子らは逆に言うと、中学生やし、目的持ってきてるので、もう土曜日の2時間びっちりやってね、「もうちょっと勉強したかってんけどな」というような子もいるような中で、参加しているかなというところですね。であと、さっき川村さんがおっしゃった通り、中学校としても、ほんとはこの子が行って勉強してくれたらいいのになという子が、三者懇談なんかで、担任の先生が4月にぱっと配っておしまいなのですが、ちょっともう1回印刷を教頭先生にもしていただいて、懇談で「これ行かへんか」というような形で、もう一度案内をするのですが、なかなか意志を持って、ということがないかなと。

昔、クラブの子で、どうしても勉強が気になる子がいたので、もう土曜日のこの時間は、クラブにくるなと。勉強をしなさいと。昼からの練習の時は、だからその勉強を終えて、そのまま練習においでと。練習時間がかぶったら、勉強を優先。ただし試合は来てくれと、言うことは言うて、「先生ひどいー」って言いながら勉強も大事やって本人に言って行かしたことも、サタスタの場合があります。だから、自主性に任せすぎると、みんなやっぱりクラブが好きなので、なかなか参加していない。クラブしてない子は来てたりもする。というところが、第五中学校ですかね。

新谷部会長

分かりました。上甲先生はいかがでしょうか。

上甲副部会長

はい。はすはな中の場合は完全に分けていまして。サタスタはもう3年生対象と決めていて、クラブ引退した後、来やすい8月の最後の土曜日から今年度は始めています。管理員さんは学校支援コーディネーターの地域の方、自治会長もやっておられる方がやってくれて、学習アドバイザーは大学生が2人くらいだったかな、来ています。ただ来ている人数は少ないですね。10人未満ですね、サタスタ。この前見に行ったら5人くらいやったかな。来てる子は意識高いので、自分らの入試問題集とかを持ってきて、解きながら大学生に教えてもらっている様子を見ました。割とまじめな、女の子ばかりやったと思います。割とまじめな感じでやっています。

それから放課後の学び舎 Youth は、今度は1年2年って分けて、木曜日が1

年です。金曜は2年って決めていて、5月の終わりくらいから始めています。それについては、退職した元教諭の先生がついてくれて、ちょっと他の勤務と兼ねて、そのまま残ってくれています。放課後も。二つお仕事されているという感じなのですが、一日の中で。その退職された先生、ベテランの先生、男の先生と女の先生一人ずつなのですが、ついてくれて、そこに、その先生がお一人ずつになっちゃうので、学年で1年の日は1年の学年から教師が一人行く、2年の日は2年の先生が一人行くみたいにローテーション決めて、きちっと回してくれています。残っている人数、これは日によって違うのですが、テスト前とかでクラブがなかったら多く来ています。やっぱりクラブがある時は1年2年生はクラブをやっている子も多いので、10人ちょっとくらいかな。多い時は20弱くらいにいるかなと思いますけど、そのタイミングによってちがうかなっていうのはあります。

で、教材は色々ですね。学び舎 Youth については、宿題やる子もいれば、何かプリントをもらってやっている子もいますし、様々かなと思います。ただ教員がつけるっていうのが最大のメリットで、分からないところがあったらぱっとこう、教科の絡みもあって、数学の先生が英語をとってなるとちょっと難しいかもしれませんが、教えてもらったりしている姿は見ます。完全にうちはそうやって分けているっていう感じですかね。サタスタ3年で、学び舎は1年2年の日決めてやっていると、いう感じですね。

新谷部会長

分かりました。片山委員、何か質問とかあれば。

片山委員

私のところも、実際、エントリーだけして行ってないとかです。先程の話の中で、宿題をやってくる子どもの人数が多くなっているっていうのは、この学び舎やサタスタもやってくるものも含めて増えているっていう認識でよろしいのでしょうか。

事務局（杉井学校教育課参事）

質問のアンケートの中に家で宿題をしているっていう質問があるのです。必ずしているとか、ややしているとか、してないとか、答えるのですが、必ずしていると答えている子どもの割合が増えてきていると。

片山委員

増えている。それはこの学び舎やサタスタでやっているのも含めてのことです。

ようか。

事務局（杉井学校教育課参事）

そうですね。

片山委員

分かりました。

新谷部会長

中川委員と上甲委員に私の方からちょっと質問なのですが、学校側から見て、今の取組が100点満点中何点かをいっせーので言っていたきたいのですが。

上甲副部会長

学校から見て。

川村委員

私めっちゃめっちゃ聞きたいです。

新谷部会長

中学校、あくまで中学校ですけれども。じゃあ聞きます。3、2。

中川委員

え、ちょっと待って下さい。

上甲副部会長

サタスタと学び舎をひっくるめてですか。

新谷部会長

ひっくるめてですね。はい。100点満点中。

上甲副部会長

そうだなあ。

中川委員

むずかしいですね。むずかしいな。

新谷部会長

いっせーので。

川村委員

サタスタと学び舎で多分ね。中学校では

新谷部会長

ちょっと違う。

上甲副部会長

ちょっと違うかも知れないですね。

川村委員

質が違うと思います。

新谷部会長

じゃあまず学び舎で行きましょう。学び舎で。はい。

じゃあ、3、2、1、どうぞ。

上甲副部会長

50点かなあ。

中川委員

50点。

新谷部会長

はい、じゃあ、サタスタいかがでしょうか。3、2、1。

中川委員

70、くらいかな。

上甲副部会長

サタスタ、うーん、まあ70から80。けど人数が。

中川委員

2学期以降で、だから時期をね、だから五中ですと、僕全然、管理職ともし

やべっていませんし、あれなんですけど、個人的には、土曜日だけというよりは冬休みとかの何か冬期講習みたいな感じでしていただける方が、五中としてはもっと勉強しにくるかなと。実際、教師はやるのです。その自習室みたいな形で、冬休み、少しですけど、勉強しにきていいよと。先生らもついているし、みたいなので、すると結構3年生は来るので、何か夏は引退試合があったりして、夏開いたら数人くらいですけど、冬は結構な数であったりするので、時期をうまいこと行くと、もっともっとうまいこと使えるのではないのかなと個人的なんですけど。

新谷部会長

今のお話はどっちですか。どっちものお話ですか。

中川委員

サタスタですね。

新谷部会長

サタスタの話ですね。比較的成果が高いイメージをもってらっしゃって、やはり冬期講習のような形とか、結構集中的に学力を高めるという点でうまく回っている。

中川委員

いや、回してくれたらうれしいなと、ただ、そうなるとボランティアで来てくださっている方もなかなか毎日というのは大変ですし。

新谷部会長

冬期講習のように毎日は大変かもしれないということですね。そこが残りの2、30点分くらいのところでしょうかね。

中川委員

まあ、運用の仕方というか。各学校それぞれ状況があると思うのですけれども。

新谷部会長

この学び舎で50点つけた、うまくいっている点とうまくいっていない点っていうのは、どういう点があるのでしょうか。

上甲副部会長

来ている子らは、人数少ないのが一番の課題だと思うのですが、来てる子らは割ときちっとした子らが来るので、放課後わざわざ残ってまで勉強するっていう意識があるのですね。先生が2人は絶対にいるので、割と教えてもらったりできるというのがメリットかなというふうに思います。

50点という課題の方はやっぱり、もうちょっと残ってくれたらと思うのですが、ただ、1年生2年生なので、学び舎については。クラブ活動入っている子はどうしてもクラブを優先しちゃうのですよね。そういう子らって大体真面目な子らでクラブも真面目に行くので、中学校は部活動が放課後にある中での学び舎 Youth をどれだけこう、人数をね、たくさん残ってもらって一生懸命勉強する雰囲気をつくるかというのが一番の悩みですね。

新谷部会長

分かりました。ありがとうございます。討議として現状と展望というところで、この辺で討議の1は終わりという形にさせていただいて。では、今のことも踏まえて次の議題です。学校における自学自習体制の状況ということで、今サタスタ、学び舎に関わらずというところですが、これも状況ですの上甲先生、中川先生から中学校に限定されますが、少し2と3合わせてよいかなと思います。状況とより充実させるために大切なことはどういったことかという点ではいかがでしょうか。

上甲副部会長

自学自習っていうのは、たとえばどういうのをイメージして言えばいいですかね。

新谷部会長

どうでしょうかね。

上甲副部会長

たとえば、放課後学習とかそういうのを含めて。

中川委員

家庭学習とかも全部含めて。

上甲副部会長

学校の中でのっていうイメージですかね。

新谷部会長

どうした方がいいですか。

上甲副部会長

ああそうか、学校におけるになっているのか。

新谷部会長

どちらでもいいかと思うのですが。

中川委員

そうですね。2番はそうですね。

上甲副部会長

今、ちょっと学校の文言見て僕がぱっと頭に浮かんだのは、多くの中学校でもやっていると思いますけど、不登校気味の子で、教室になかなか色んな事があっていけない子が登校してきたときに、そういう子が勉強できる部屋をついているのですよ。うちでは、ガンバルームという名前をつけて、そこでちょっと自習したりとか。先生が必ず誰かいているのですけど、そういう部屋を作って、例えば給食の時だけ行ってみいひんかとか。昼からちょっとこの授業どうやとか言って、ちょっとずつ体を慣らして行って、教室に戻れるようにみたいな、そういう校内の適応指導教室みたいなところをちゃんと位置付けていて、そこに先生がつく、みたいな体制を作っています。

はすはな中いいなと思うのは、部屋がちゃんと、図書室の奥に自学自習室っていう部屋があるのですよ。20人以上入れるのかなあそこ。30人くらい入れるのかな。ちょっと仕切りを買ってですね。そういう子らってすごくナイーブな子が多いので、こういう感じでなかなか勉強しにくい子もいるので、仕切りを作って、なんかブースみたいになっています。そこで勉強しているのです。それはすごくいいなと思います。ただ、マックスで5人くらいです。その部屋使っているの。のぞきにいったら一人しかいてない時もあるし、日によってちがいます。ただその一人は毎日来る子です。起立性調節障害のちよっところ、あれを持っていて、朝起きれないから、12時過ぎにいつも来ているかな。給食終わる頃に来ている真面目な子なんですけどね。その子はしっかり勉強していますよ。自分で自習ですけどね。

ただこれのネックは、子どもらだけにできないので、先生が必ず常時つける体制を作っているのですよ。となると、はすはな中の場合は、加配教員をもらっていて、児童生徒支援加配の、こども支援コーディネーターっていう名目があ

なのですが、その加配の先生が時間割も全部作って、誰が来てるかも全部状況把握して、その先生が多く時間ついています。どうしてもその先生だけで回らないときは、他の先生方にちょっとずつ、時間割持ち出してもらって、つく体制を作っています。はすはな中の場合はそういう加配の先生がいるからすごくスムーズに回っているけども、もしそういうのが、加配がついてない学校でこういうのやろうとしたら、先生らの負担がものすごい大きくなると思います。

新谷部会長

先々週行った学校がまさにそれで、7人くらい教室にいますけど、加配が結構入っている学校なので、まだ回っている方ですが、それでも校長先生2時間、教頭先生1時間はそこについてしなきゃいけないという。加配は一人だけですよね、この児童生徒の。

上甲副部会長

そうですね。生指関係はうちはその先生ひとりですね。他の加配はまた名目違うやつはありますよ。学力向上のとかありますけど。

新谷部会長

そういう余裕があるからまだできるけど。

上甲副部会長

回せている部分もあります。もしその加配がなかったらどうなるのかな思ったら、ちょっときついかもしれませんね。先生らの持ち時間が、まあ週平均例えば20コマとしたら、2・3コマ増えるかもしれませんね。

新谷部会長

つまり自学自習というけれども、自学自習はほったらかしにすることじゃなくて、その子たちの目標と計画も一緒に考えてあげて、それをちゃんと丁寧に見守るっていう体制を含めるっていうこととして、ほったらかすわけではない。

上甲副部会長

そうですね。必要なプリントとかもその時ちゃんと渡してあげたりとか、そんなのもしていますので、プリントちょうだいっていう子もいるかな。サタスタの時とかに使うプリントとかもそこに全部置いてあるからね。教材出した

りとかもできるんですよ。僕もたまにはのぞくようにしてるんですけど、まあ、ちょっとね、一緒に勉強したこともありますけど。

新谷部会長

特別支援が必要な子どもたちと同じように、行ったことのある学校は教科ごとの学習計画みたいな目標と学習計画を一人ずつ提示して。それをもとにどういう先生が入ってきても継続して関わられるようにという取組、あと個別の履修カルテみたいなものをファイルで作っていましたが何かそういう取組をしていましたか。

中川先生いかがでしょうか。

中川委員

そうですね、学校におけるとは書いてあったのですが、やっぱり中学校としては家に帰ってしっかり復習してほしいっていうのもあるので、第五中学校だけじゃなくて、これ門真全部で、学力向上担当者の会議とかでも出ていますけど、名前はちがいます、家庭学習ノートっていうのを多分どこでも、させられているというところですけど。家でちゃんと復習しいや、宿題以外プラスアルファしいやって言っても、何していいか分からない子らに、ノートに、1日1ページ、最低でも。2ページ3ページしてもいいよとは言っているのですが、しておいでと。それを毎朝、担任の先生に出して、担任の先生がチェックをして、というのをどの中学でも取り組んでいます。そのノートを見ながら、担任の先生が、その子に応じて、単語を一生懸命書いている子もいれば、君のレベルやったら、もうちょっとこういう勉強をした方がいいんじゃないのと。全体に学級通信とかで伝えることもありますし、私が担任してたときは、三者懇談で家庭学習ノートを保護者の方に見てもらって、もっとこういうようなことをした方が、もっと成績伸びるよみたいな感じで使わせてもらってました。実際お家でやっていたことが形で残りますし、出さない子は、家で勉強してないということなので、会議とかないときには、家で勉強せえへんねんやったら学校で残って勉強しようとかか。それこそ先程のサタスタとか学び舎でカテガクしてる子も、あ、カテガクって略しているんですけども、カテガクしている子もいますけれども。学校としても、勉強しいや、先程の新谷部会長が言っていたとおり、しいやって言いっぱなしじゃなくて、それをチェックじゃないですけど、それをもとにまた声掛けができるようにというふうに使っていたりします。

新谷部会長

分かりました。片山委員、自学自習について、ご意見とか、感想とかあります

か。

片山委員

まさに、今おっしゃられた内容が答えになっているのではないかなと思います。自学自習の体制を強めれば強めるほど、やる子はどんどん伸びていくし、やらない子はいくら言ってもやらないし、極端になってくると思います。ボトムアップを目的に、学び舎やサタスタを開設している話だと思うのですが、それが逆に仇になっている。やる子はやるけれど、やらない子はやらない。先程おっしゃられた家庭学習ノート。あれも、正直、やる子は、自分で課題を見つけてどんどんやっていくのですが、やらない子は何をやったら良いのかが分からない。うちの子もそうだったのですが、とりあえず単語をガーッ書く。書けば良いと思っているようでした。あと、余談になるのですが、この前テレビで観た自習ノートの対策で、手にペンを縦に2・3本まとめて持ってノートに書くらしいのです。そうすると、2、3行まとめて書けるそうです。

上甲副部長

行をかせぐと。

片山委員

そうなんですよ。それでページを埋める。そういう荒技を使って、とりあえず課題だけをこなす。埋めるだけ埋めて、はい終わりってことです。はっきり言ってそれでは意味がないですよ。そういうところにだけ知恵が回るんです。自学自習のあり方を考えるのであれば、取組方法をもう一度、原点から考え直した方がいいんじゃないかなと思います。

新谷部長

取組と目的ですね。

片山委員

そうですね。せっかく、学び舎とサタスタが設定されているにも関わらず、それが生きていないのではないかなと思います。

新谷部長

なるほど。当初の事業の目的だったボトムアップのところに焦点化した事業になっていないんじゃないかということですね。

片山委員

そうです。その他に、上野口小学校ではキラキラタイムという取組がありまして、ちょっと学習が遅れている児童を、半ば強制的に集めて、放課後に勉強させています。それについては、苦手なところを教師がついて教えていく、という形をとっています。

川村委員

多分小学校どこも。

片山委員

やっていますよね。

上甲副部長

やっているかな。

川村委員

うちの小学校も、毎週木曜日は課題のある子を呼んで先生たちが。

片山委員

キラキラタイムですか。

中川委員

名前は違います。小中合同の会議とかでも聞いたことが。もちろんそうやって残りっていうて、先程あったように残ってくれたらいいんやけど、逃げていく子もね、残念ながらおるけど、ぶつぶついいながらも残ってやってる子がいて、時間とってますっていうのは、私も聞いたことがあります。

川村委員

サタスタと学び舎の件で言ってもいいですか。多分、もともとは、ボトムアップを目的には、これって始まってないんです。どっちかっていうと、自学自習もできて、子どもの居場所づくりっていう色の方が多分濃くって、宿題をしない子どもたちも多いし、門真の学力もってところでの、居場所づくりと、自学自習教室ってところでそこをしているので、多分、私はボトムアップしたらいいのに、って思って携わっていますが、市内全域に渡ってそれがされているかっていうと全然そうじゃなくって、きっと、来て宿題をさせようとか、プリント学習ができるのでさせようとか。来た子に対応するって

いう意識のもと、多分皆さんされていると思うんです。

学び舎は平日なので、やっぱりスタッフが集まらないとなかなか開設できないってところで、小学校の方は数が少なくて、逆に中学校の方は、先生が入ってくれて、学力的に先生が入らないと難しいところもあるので、中学校の方が割合的には実施校が多い。サタスタに関しては、府からの事業でもあったので、もう一斉に統一して、最初はもしかしたら欠けているところもあったかもしれないですけど、ほぼほぼサタスタは統一してスタートしたんです。中学校の方はやっぱりクラブがあるので、なかなか子どもが集まらないってところで、やめるやめないって議論も、生涯学習の学校支援の方では、話がありまして、でも、一人でも二人でもやっぱり来て学ぶ子がいるのだったら、継続はした方がいいんじゃないかっていう、そういう話し合いのもと、では2学期から、やっぱり、クラブ終わって2学期の方が、人数は増える傾向があるのでってことで、じゃあ2学期からスタートしようっていうふうに始まったんです。

片山委員

なるほど。

新谷部会長

そうすると、当初の事業の目的もあって、実状に応じて変化してきて、それでもやっぱり来ている子にとっての学びに対しては、十分支援できている部分があると。今回議論しなきゃいけないのは、一人ひとりの学び、門真全体の子どものことを考えるとこの事業の網がかかっていない子ども達に対して、これからどう手立てをするのかってというのは、今の事業のまた範囲外のところで、もう少し手立てをしなければいけないってことになってきますよね。

あと、自学自習というところで、個人的な体験をちょっとお話しさせてもらうとアメリカの高校に留学している時に、結構、高校生で妊娠、子ども抱えながら来ている子とかが通っているような学校だったのですが、昼食の時間の前と後ろ、人数の多い学校だったので、2つくらいのグループに分かれて、それこそ自学自習の時間が含まれていました。学期の最初にタイムマネジメントの授業があって、自分でちゃんと計画立てて、学習を進めていかなきゃいけない、手帳の使い方とかそういうのもやって、昼食前にその時間を使って学習していました。しんどい子は教員がそこで対応する。そして、昼食後のグループはまた同じようにするっていうのがあって、日本でもあったらいいのになって思いました。

確か市内の小学校でも昼食の前後ぐらいに全員ではないですが、何人か抜き出

して、学校にいる間にとりあえずやっつけてしまおうと。放課後っていうともう逃げるので。京都の舞鶴の方の中高一貫だったと思うのですが、そこはもう受験ということで、受験に向かうんだったらもう教え込みでやっても動かないので、自分でちゃんと目標を決めてやる。それこそ今のサタスタとかの事業とかに近いのですけれども。そのための時間確保でこれも学校の正課の時間の中で、自学自習の時間っていうのを作っていましたので。これから小中9年間っていうことを考えると、9年間の学校にいる時間の中で、自学自習を自分でできるような、教員とか学校とかの関わりっていうのが、多分一つ必要なのかなと、お話ししてて思いました。ボトムアップというところで。

片山委員

確かに、自学自習が目的であれば、取組方法をもう一度見直した方が良いんじゃないかなという気持ちが強いのと、川村委員がおっしゃった居場所づくりが目的なのかあれば、それはそれで、ちょっと違った場を考えてみるのも良いんじゃないのかなと思ったりもします。

実際、うちの子が通っている中学校では、半分くらいの生徒がクラブ活動に参加していないと聞いていますので、その子たちが学び舎 Youth に行けば、もっと参加人数は増えているはずなのに、参加人数がそれほど伸びていないことを考えれば、やはり学び舎 Youth への参加意識が低く、家に帰ってしまっているのだと思います。

新谷部会長

ありがとうございます。いくつか対象とする子どもの姿が見えてきたんですけども、一つは、目に見えている教室に来ている子たちですよね。自分たちで、何かしら目的をもってやっている子ども達。もう一つは、事情があって、ほんとは来たいけれどもクラブと色々なことが重なって来れない子。もう一つはもっともっとほんとは来てほしいのに来てくれない子。まあこの3つくらいに分かれてきたと思うんですが、残り時間が25分くらいありますんで、最後の4のところですね、じゃあ9年間、3つのステージに分けた時に、今大きく分けた3つのタイプの子も達がそれぞれどういった取組が必要になるのかなという点ですね。

1年生から3年生、4年生から6年生、中学校で今、サタスタなり、放課後に来てる子ども達は、ある程度カバーできている。あと細かな、実際に関わる中で改善していけばいいと。特に来られない問題、ここですよね。ここが一つ、どう運用していったらいいのか、ここはあんまりなさそうでしたね。一番の課題は、来てほしいけど、来てくれない子ども達にどうするのかっていう、大体

こういうふうな課題の整理になるかなって思うのですけども。クラブのところは、もう、先程中川委員から提案があった冬期講習みたいな形とか。

上甲副部長

集中型やな。テスト前とね。

中川委員

そうですね、だから、先ほどの学び舎とかでも、テスト前は、来れる。で、普段水曜日ですけど、水木金で、3日間テストの時なんかは、ボランティアの方に無理いうて火曜日にしてくださいって、前日やして言ったら、ほんならって結構来てくださって。うち来て下さればいいですよって、言って下さるので、うちとかと、三中さんもそんな感じではあったと思うんですけど、曜日をちょっと、無理言うたりとかした時もありますけど。

新谷部長

あと、そうですね。おっしゃるように時期をずらして集中的に取り組むとかそういうふうな解決になるかなと思うのですけれども。特に来てほしいけど来ない子ども達の学習支援ですね。一人ひとりの学びに応じた学習支援ということなので。これはサタスタ、学び舎の事業から少し外れてもいいと思うのですが、学校、家庭、地域、それぞれの中で、自学自習ということ念頭に踏まえて、もう少し砕いて言えば、目的である学習習慣の定着とかそういうところのために、本当は来てほしいけど来ない子たちに対してどういう手立てがあるのかってということですね。学校の中でどういうふうな手立てができるのか。家庭とか地域でどういう手立てができるのか。川村委員が実際に関わっている中で、さっき本当は来てほしいのになあっていう、何か、もう少しこう、行政的なサポートとか、学校のサポートがあれば、もうちょっと網かけれるのになとか、ありますか。

川村委員

もう、学校との連携だと思います。でも、私はさっきのサタスタのパーセンテージ70って、すごい高いなと思ったんです。もっと低いと思ってたんです。もともと最初始まった時はサタスタも学び舎も、そんなボランティアが教師みたいな真似事してどないすんねんみたいな、バチバチもあったとかなかったとか、すごく聞いていたんです。私は先生の負担をかけるための事業ではないと思っているので、あえて来てくれとは言わないです。だから土曜日はいつも先生、何か行事があって土曜日ある時はのぞいてくれる時もありますけど、まあ基本

いらっしやなくて、で水曜日の方は、やっぱりスタッフの中で分からないことがあったり、あまりに子どもが、やっぱり2年生から6年生までいるとすごくざわざわするんです。それがもう教室に40人ぎっちり入ったら、もう手に負えないときに、ちょっと先生に言ったら、教頭先生や校長先生が一喝しに来てくれて、ちょっと落ち着くとか、すごくそういうのはあって、2学期入ってすぐのときも、そういうのがあったときに、学校側に少し相談したら、先生が、各クラス、全部のクラスの先生が、「水曜日は遊びに行くところじゃありません」って言うてくれたみたいで、その後、びっくりするくらいやっぱり変化があったんです。そしたら、子どもらもちょっと真面目に、だから「おばちゃんあそこうるさい！」とか、「あの子ら遊んでるのにもう帰らしてえや！」とかっていう声もあるんですけど、でもその子はやっぱり分からへんからうるさいし、気が散るだけで、だからそこにスタッフが一人つくと、その子も時間はかかってもやっぱりするんですよね。だからどこを大事にするかで、その子も来てほしい子なんです。言ったらね。だからそこをどんだけ大事にするかで、そういう子が継続してくるようになるっていうのも繋がるし、そういう先生の声掛け一つで、そういう子らも、「ちょっとだけ行っておいで」、「10分だけ行っておいで」とかって声掛けがあってもいいような気がするし、なんかこう連携が取れるといいんじゃないかなど。

新谷部会長

私も中学校でのキャリア教育とかで授業したことあるんですけども、やっぱり学習規律の入っているクラスはやりやすいけれども、何かやっぱりそれが入ってないとやっぱり専門家でないと難しい部分があったり、普段からコミュニケーションがとれている教師と生徒であれば、教師の言葉かけ一つで、ちょっとやる気になってくるのもあるので、そういう規律とか、動機づけ、後押しのところでも連携とってくれれば、もうちょっとうまくいくんじゃないかっていうお話ですね。

何かありますか。

片山委員

連携ですね。確かに連携が大事でしょうね。先程、3教室で1教室が図書室っておっしゃっていましたが、それは、本を読めることも考えてのことでしょうか。

川村委員

はい。そうです。

片山委員

すごくいい取組だと思います。

川村委員

少ないですよ。図書室に行く子はね。

片山委員

そうですか。

川村委員

少ないですけど、一応最初から。基本的に水曜日の方は、まず宿題してから図書室に上がりましょう、で、もともとは図書室でやっていたんです。だから学校によっては図書室でやっている学校もあるのですが、うちの場合は、何年か前に校舎が新しくなって、そのときに図書室はやっぱり本を読む場所として子ども達に定着させたいっていう、その当時の校長先生の思いがあって、それだったら、教室を変えましょうかって今理科室と家庭科室を使って学習はやっていて、その後本を読む子は図書室に上がりましょうっていう感じで進めています。

片山委員

やはり、勉強という言葉が入ると毛嫌いして来ない子もいると思うのですが、うちの子も、勉強は嫌だけど本は読みたいと言っています。毎日でも図書室を開けて欲しいということを行っていますので、学び舎やサタスタのときに図書室が開いていると、行こかなって思うかもしれないです。また、勉強だけではなく、実験のようなイベントも必要かなと思います。

川村委員

学び舎はポイント制にしています。うちの学校はね。

片山委員

ポイント制ですか。

川村委員

スタッフが、ちょっとずつ出し合ってね、百円ショップで消しゴムを買ったりとか、ノートを買ったりして、毎回来て宿題をしたら1個ハンコ押してあげる。

それ以外にプリントしたり本を読んだら、もう1個押してあげる。だから図書も本を読んだら、何の本を読んだかを書いて、一応感想を聞くんです。そしたら2個で、それが20個たまったら消しゴムあげるねとか。物で釣ってるっていう。これも最近っていうか、最初は何もなかったのですが、やっぱり子どもらも何かないと頑張る気持ちが違うかなっていうので、やり出したら、最近はやっぱり、「もうちょっとで何ポイントたまるから今日は宿題以外にも本読んで帰る！」とか、そういうのはあります。何もなかったら、やっぱりしんどいかもしれないです。だから中学校なんかはね、そういうのもないし、もともとと言うことも聞かない年代だから、先生の声掛けとか親の声掛けでも、もう行かんってきめたらやっぱり行かないのかなって。うちの子は自主学ノート20日溜めていますとか、懇談のたびに言われて、やるまでクラブ行かさんで！とか、家でそんな会話が交わされるくらい。親がいくら言っても聞かないし。自主学って難しいですよ。

片山委員

私見になりますが、勉強が嫌いな子どもは、クラブ活動などに逃げちゃっているのだと思います。親としては勉強して欲しいけれど、子どもはクラブを理由に勉強しない。いっそのこと、成績の悪い子はクラブに来るなど顧問の先生から言って欲しいくらいです。成績の悪い子は、半強制的にクラブ活動に参加させないというくらいの姿勢で取り組んでほしいと思うのですが、一方でクラブ活動も必要だという声もあるので、難しいところですよ。

中川委員

五中一回、夏休みの宿題が終わってない子たちが、クラブ活動の場所で机を並べて、宿題をしましょうっていうのを何個かのクラブで申し合わせて、私は卓球部なのですが、体育館のところに机を並べて「ほらみんなしてるな、したいな、早くしいや、宿題」っていうのをやらせたことは確かにあります。いいのか悪いのかは、ちょっとさすがにね。もう宿題しなすぎるので、ちょっとがんばろかっていうのは、去年かな一昨年かな。

新谷部会長

確かにね。クラブやって家帰って、宿題はできないですよ。疲れきって。

片山委員

はい。上の子が高校生でクラブ活動に参加しているのですが、成績が伴わないと強制退部になるそうです。

新谷部会長

その辺は、ほんとに宿題だけじゃなくって中学校のクラブの強さというか、影響力の強さが関わってくるところで、非常に難しいところですね。

中川委員

強制退部は逆に五中としてはさせたくないし、やっぱりクラブで輝いてる子らもいるので。

片山委員

そうですね。

中川委員

でもそれだけじゃないよっていうのも伝えないといけないので、あの手この手を僕らも考えるのですけれども。

新谷部会長

川村委員のポイント制っていう話があって、子どもの発達段階に応じた支援の仕方ってということで、それもありがたなと思ってしまして、市川伸一さんが「学ぶ意欲の心理学」という、結構、2006年ぐらいに出した新書があるのですが、大学生に、どういう動機で勉強したかっていうのを聞いたのがあって、6つくらい要因があるのですが、大きくは2つに分けられて、勉強そのものの要因で、おもしろいからとか受験に役に立つからとかっていう要因はあるのですが、そこに至るまでに、やっぱり、勉強以外の要因もあると。一つは報酬思考でなんかもらえるからとか、まあ友達が来ているからとか、負けたくないからっていうのがあるので、やっぱりポイント制であったりとか、ここが居場所になっている、友達が来るからっていうので、2週間前に行った学校も学校に来れない子ども達が集まるから、何かすごい絆が生まれていたようで。なんかそういうふうなものも必要なのかなと思います。

あと、図書室の本とかは、何か十分にあるのかなと、教材関係、今、学校に学習支援のPCですか。学習教材があるって話がありましたけれども、市内なんかでは学習アプリを使っていたりとか、こういう教材とか学習環境があつたらもうちょっとやりやすくなるのになあとか。これもちょっと、アメリカの話で申し訳ないのですが、小学校から中学校の子どものデータをつないでいるのですね。この子どもはここが弱いっていうのが、もうデータベースで残っているのです、その躓きを中学校入学前に消してしまおうっていう取組がされていたり

するのですが、なんかそういう、学びの履歴というか、学習環境全般で、こういうのがあったらもうちょっとやりやすいのになとか。学校側、家庭側、何かありますか。

片山委員

図書室に結構いろんな本があります。

新谷部会長

ありますか。

片山委員

はい。種類は多いです。在籍している学校や他の学校の図書館に入る機会がたまにあるのですが、かなり充実しているので。

上甲副部会長

うちの学校なんか、司書が週に2・3回来てくれていて、午後中心ですけど、いてくれる日はやっぱり子どもらもよく行きますし、昼休みとかもね、開館していたらのぞきますし、いいなあと思うのですよ。この前、司書の方がなんか、卒業証書みたいなのをいい色紙に印刷していたから、何をしているのか聞いたら、3年生の卒業にあたって、3年間、その子がどんな本を借りたか、何冊借りたかみたいなのを表彰状っていうのかな、卒業証書みたいな形にして渡すんですって言うので、面白い取組だなと思って。でも3年間一冊も借りていない子もいてるのとちがいますか言ったら、そんな子はほぼいないですよ。というのは朝読の取組があるから、各学年何週間か決めて、朝の10分間読書みたいなのをやっていて、その時に担任が図書室連れて行っているのですよ。家から本を持ってこれない、家に本なんか置いていない子は、図書室で本を借りているから、ゼロいう子はいないのですよ、ということをおっしゃって。一番借りている子でどれくらい借りているのってこの前聞いたら、3年生の子で年間50冊読んだ子がいて、僕より読んでいるんじゃないのかというくらい。一週間一冊以上のペースなので、そんな子もいるんだと思って、大いに褒めてやってねってな感じの会話をしました。図書室は一定、そういう利用価値が高くって、子どもたちにとって居場所って言うといいのかは分かりませんが、うちの図書室は新しい学校ですから、カーペット敷きになっているので、寝転がれるのですよ。寝そべて読んでいる子もいて、図書部っていうクラブもありますから、本好きな子が結構いますよ。司書の方が上手にポップ、紹介のポップを作ってくれたり、あるいは生徒に作らせたりとか、飾り

付けがかわいいですね。何々の日とか。先生のおすすめ本コーナーみたいな感じで、なんかポスターみたいな写真を僕もこの前とられて、掲示してもらいました。今まで読んだ本で面白かった本みたいなのを紹介したりとか、工夫しているの、結構図書室、勉強苦手でも図書室好きみたいな子もいるんじゃないのかなというふうに思いますね。

ちょっと話が変わりますが、いわゆる来てほしい子というのはやっぱり中学校でも一番の悩みで、学力に課題があって学習意欲の低い子が、放課後残って勉強せえと言ってもまず来ませんよね。正直言って。クラブもやっていなかったら、もうはよ帰りたいとかね。そういう子らはやっぱり授業でどこまで惹きつけるのかと言うのが、一番の僕らの仕事でもあると思うので、授業中寝ている子が、放課後に残って勉強せえ言うて残るかと言ったら、まず残らないから、何かの強制力、よっぽどのね、強制力が働くか、やっぱり受験直前だったらさすがにやらないといけないという、なんかモチベーションが上がる時期か、ぐらいしかぼくはあまりイメージできないですが、ほんまにこの来てほしいのに来ない子、サタスタや学び舎とか、色んな授業外の学習の場面で、その子らに意欲的に勉強させるかっていうのは、我々の永遠のテーマとちがいますか、中学校の教師のね。というのには常に思っています。

ぼくもこの仕事 30年ちょっとやっていますけど、ほんとに 30年前の子らは、もうちょっと例えば受験前になったら朝毎日早くおいでやと。7時過ぎに来て、勉強教えてあげたりとかね。呼びかけたら何人かは必ず来たのですよ。冬休みとか夏休みでも、クラブの時間以外ですけど、自主的に勉強せえへんかって言ったら来たものですけど、最近はそういう子がやっぱり少なくなったなあというのはすごく実感として思いますね。学習意欲のほんとに低くて、学力もちょっと課題のある子を、どうやって惹きつけてやるかっていうのを、授業を含めてですけども、非常に悩ましいところだなと。そういう子らはサタスタも学び舎も来ないので、ずっと学力も低いままなので、そこをどうするかっていうのはほんまに永遠のテーマかなと思いますね。授業以外にプラスアルファで残ってやろうとか早よ来てやろうと言っても、まず乗ってこないです。それをどうするかです。

新谷部会長

基本はやっぱり学校の授業。

上甲副部会長

そうですね、基本はもちろん授業だし、昼食の前後の時間ね、上手に作るとか、ちょっとカリキュラム上、ちょっと難しいなと思うのですけれども、今の日本

の教育制度の中では。そういうのを工夫出来たらなあと思いますけどね。

新谷部会長

一昨年入っていた市内の中学校なんかでは、やっぱり 12 時くらいからしか来ない子どもたちが何人かいるのですが、家庭科の時間があつたら来るとかね、体育だったら来るとかっていうのがあるので、放課後の授業もそうですけど、やっぱり体験学習っていうところもあると思うのですが。座学だけでない、なにかこう一つ一つ、あればなあと思うのですが、なかなか学校の先生がそこまで手が、忙しくて回らない部分を、地域の人材を活用して体験学習みたいなのが増えていけばいいのかなというのも、ちょっと思ったりしました。

川村委員

あの、一つ質問してもいいですか。授業、子どもたちの学力って、やっぱり小学校 4 年生とか 5 年生の授業がすごく大事で、そこで躓くとなかなか中学校の授業も。あれはやっぱり中学校の先生から見ても感じますか。その辺、その小学校の基礎がもう少し底上げされてたら、中学校でしんどくなる子は減るんじゃないかなとか。関係ないとか。

上甲副部会長

具体的に言うと例えば分数計算ができるとか、小数計算とか正負の計算とかね、言ったら高校入試の数学の一番の最初の問題で、これが解けるか解けないかというのは、もう大体分かるな、見たら。中学に入ってきた時点で。この子、数学でこれだったら、もう高校入試の一番、ちょっと厳しいだろうとか。というがあるので、やっぱりその辺は押さえておいてほしいなというのは、やっぱりあるかな。

例えば、英語で言ったらローマ字が全然読み書きできないのに、英語の単語とはまた別なのですが、また発音の仕組みも別ですけど、まずできません。**Kadoma** って書けない子が英語できるというのは見たことないんで、そういうのはやっぱりありますね。そういう意味での小中連携が必要かなというのはあります。

中川委員

私は理科なので、それこそ計算問題が出てきますけど、分数で中学 2 年生で、「先生、上÷下やったっけ、下÷上やったっけ」と。もうそこからか、って思っ、僕がつくこともあれば、今よくグループ学習とか班学習とかがあるので、「ちょっと教えたってえや」「分かった分かった」みたいな感じで、こうやって、

割り算の筆算とか、いうところの子もやっぱりいるので。それが分かった上で理科の計算なんですね。まあ算数ができての理科という形になるので、多少なりとも。やっぱりね。

川村委員

その、サタスタとか学び舎とかを考えたときに、中学校にもサタスタはあるんだけど、毎年何人か、小学校のサタスタに来る子がいるんですよ。基本的にはあなたたちは中学校だから中学校でやりって言うんだけど、何となく、中学校でおっつかんから小学校の復習がしたいんかなとか思う時もあったり、こちら側のスタッフとしても入る側も中学校の勉強はむずかしいけど小学校はいけるかなっていう人の方が多いので、小学校で活用ってすごく可能かなって思った時に、そういうのを学校の授業でも、やっぱり一律じゃなくて少人数をちょっとね、力を入れるっていうのも必要やし、そういう放課後の時に、すくい上げてやる、声掛けひとつ、やっぱり先生と連携とってこの子はちょっとしんどいから、学校の先生が設けている日もあるけど、それともう一日別日で、もう1回復習しておいでみたいな、なんかそういうのもあれば、ちょっと底上げが。やっぱり小学校が大事なんかなっていう気がします。

新谷部会長

なるほど。わかりました。

もう、10分前になりましたので、ちょっとまとめて協力いただければと思うのですが。ペアでちょっと書いていただきたいことが。一つは討議の柱1の、サタスタ、学び舎の現状と展望について、議論したことをそれぞれまとめていただければと思います。もう一つが、討議の柱2から4、全部に関わって、じゃあどういふふうな支援をしていけばいいのかという、この2点。現状と、今後の支援の在り方ってことを、ちょっとお二人で討議いただきながら、まとめていただけると助かります。

(上甲副部会長・川村委員、片山委員・中川委員のペアでそれぞれ話合い中)

新谷部会長

では、ちょっと簡単にお話いただいた内容を読み上げていただいて、あとはみなさんのご意見を報告させていただこうと思っておりますので、どういった内容をお話し合いになったのか、少し教えていただけますか。

中川委員

はい。こちらの方は、1番と2から4に分けて。1番の方は、先程から話がありましたけども、根本の居場所づくりとしては、すごくマルな感じですが、自学自習という形ですと、制度の位置づけの再検討が必要ではないかなと。来てほしい人が、来てくれるようになってほしい。やっぱり参加者として来てくれる人は、結局意識が高い子たちで、その子たちが勉強すればどんどん成績はアップしていくけども、ボトムアップとして考えていくときには、どうしていくべきなのかなというのが課題であり、今後、より考えていくべきことではないかなというふうに考えました。

あと2から4に関しては、やっぱり動機づけですね。来てほしい人が来てくれる人になるためには、動機づけであったり、興味を持ってもらうということで、先程川村さんが言ったとおり、小学校であれば、外的な動機づけも含めて、最終的には勉強が楽しいなあとか、勉強しているなあって、キャリア教育の中でつながっていくことですがけれども、最初はそういう外的な部分も含めたり、国の学力調査でも聞かれるように、本読むのも大事だし、図書室に行ける環境を、開放をする。図書室にちょっと足を向けるためのいろんな取組なんかも、どんどんしていくべきではないかと。興味を持つ動機づけっていうところに、どう対応していくべきかなということを少し話をさせてもらいました。

新谷部会長

ありがとうございます。では、

上甲副部会長

よろしいですか。ちょっと話がいろいろ広がってしまいましたが、まず1番の学び舎、サタスタについては、本当に来てほしい子が来てくれないということが課題だと思います。中学校はクラブの壁があるなど。勉強が嫌いな子はどうやって惹きつけたらいいのだろうかという事ですね。サタスタについては小中ともに申込制でやっているの、来ている子はきちんとやってくれているということで。ただ、人数がちょっと少ないのが、特に中学校は、悩み、課題かなというところですね。

2から4については、大前提としてなんで勉強する必要があるのかと。というのを子どもが考えるっていうかイメージできる、自分の将来とかキャリアをイメージしたり、デザインする力がそもそも子どもにないと。それをさせるのは親や教師の仕事だと思うのですが、一部の親は、別に勉強せんでもどないかなるで、みたいな自分がそういうのをおくってきている親ほどそういうふうに、子どもにそういうふうに言葉がけしてくれないというのがすごく悩みの種かな

っていうのが出ていました。やり方としてはやっぱり小学生低学年くらいだったらご褒美あげるとかそういうやり方もあってもいいのかなと。ただ小学校の高学年くらいからはやっぱり勉強嫌いがはっきりしてくるので、どうモチベーションを上げてやるのかっていうのがやっぱり課題だろうと。家庭学習ノートのやり方すら分からない子どもがいて、それはどうするのかと。学校によったらプリントなんかを一枚もらって、毎日。やり方が分からない子はそれを解くとか写すというのも家庭学習ノートをしたことになるみたいな取組をしている学校もあるということです。そもそも勉強は楽しいぞと、必要やぞと、思わせるような仕掛けがあるだろうということでした。ちょっとまとまらなかったですけど。こんな話を二人でしていました。

新谷部会長

はい。どうもありがとうございます。では、少し時間を過ぎましたが、活発な議論をいただきましたので、これで、討議の柱に沿った議論ができたと思いますので、終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

全委員

ありがとうございました。